

# 土佐のわらべ

第388号 《第410回（2013. 11. 14）子どもの本の読書会記録》参加者5名・文書参加5名

## 『セロひきのゴーシュ』

宮沢賢治作 茂田井武画 福音館書店

11月は芸術の秋まっただなかです。そこで、音楽をテーマとして多くの人々に知られているこの本を、読書会でとりあげることになりました。折しも今年には宮沢賢治没後80年にあたっていました。

「本の中から音楽が聞こえてくる。」これは、読書会で発表された感想です。それはラストシーンの絵で、一番顕著なのではないでしょうか。

ゴーシュの弾くアンコール曲の迫力が、驚く観客の顔々から強く伝わってきます。と同時に、その暖色系の背景から、艶やかで温かい音色が立ち昇ってくるように感じられます。動物達とのやりとりで、音楽の腕を上げたゴーシュ。リズムや音程など技術的な面もさることながら、感性も磨かれていったのです。音楽に込められたゴーシュの感情が、輝く黄金色となって本から迸り出る、なんと見事な絵が描かれているのでしょう。

このようにこの本を考える時、絵を描いた茂田井武をぬきに考えることはできません。病の床に臥していた茂田井が、その仕事ならぜひ、と自ら受けただけあって、この本の絵には、朴訥な中にも温かさと鋭さがあり、人を惹きつける不思議な魅力があります。

そして、その影響力は強いものでした。後に数々の絵本で名を馳せることになる赤羽末吉の出発を決める、その切っ掛けとなったのです。

当初この本は、雑誌「こどものとも」2号として福音館から出版されました。賢治の原作を佐藤義美が短い文章にまとめ、茂田井武が絵を描いています。それを見た赤羽末吉は、その絵に感動し、自分を託すのはこの出版社だと腹をきめたのだそうです。

（『絵本よもやま話』赤羽末吉著・偕成社より）この流れから生まれたのが、あの『かさじぞう』。なにか、画家から画家へ渡されていく見えないバトンを見る思いがします。

「賢治の本ほど、読む人によって感じ方の違う本はないのではないか。」これも読書会で出された感想です。今回の読書会でも様々な意見がありました。物語の世界になかなか入れなかった人や、感想を言うのが難しいと思った人。淋しさやせつなさを感じた人もいれば、逆に、面白さやユーモアを感じた人もいました。

読む人によって受け取り方が違い、また、同じ読み手であっても、年数を経て再読してみれば、違った感情を抱き新たな発見をする。賢治の物語の魅力は、そんなところにもあるのかもしれない。だからこそ没後80年経った今でも、多くの人々が賢治の本を手取るのでしょう。

文学と絵、そして音楽と、芸術を一度に味わうことのできる『セロひきのゴーシュ』。今回の読書会では、まさに深まる秋に相応しい1冊と出会うことができました。

(N.T)